



Title	シュテファン・ゲオルゲ研究 : 伝記(2)
Author(s)	八木, 浩
Citation	大阪外国語大学学報. 1961, 10, p. 19-37
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80187
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

シュテファン・ゲオルゲ研究 伝記 (2)

八 木 浩

Stefan George - Sein Leben (2)

YAGI Hiroshi

Umriss

Nachdem George in "Algabal" seine Geisteshaltung als "Bruch mit der Gesellschaft" erkannt hatte, wandte er sich einer weit menschlicheren Richtung zu, nämlich der Erforschung des Urbildes des Menschen. "Die Bücher der Hirten- und Preisgedichte, der Sagen und Sänge und der hängenden Gärten" sind ein Versuch, die drei Bildungssphären der europäischen Kultur zusammenzufassen. Er musste eine möglichst objektive Haltung bewahren, um so entfernte Welten darstellen zu können. Wenn er den Stoff inhaltlich historisiert hätte, wäre er einen anderen banalen, epigonenhaften Weg gegangen. George suchte aber nicht nach dem Spieltrieb des Menschen, sondern seinem Wahrheitstrieb. Seine Gestalt als Erforscher der Wahrheit ist im "Herr der Insel" verdichtet. Der Vogel ist weit entfernt von der Freude der Masse. Der Vogel der Insel ist nicht der Schwätzer, der unnötig weiter schwatzt, wenn die Männer landen. Als er stirbt, lässt er die Insel im Reichtum zurück.

Hofmannsthal, der Erstarren als Tod, das Wandeln als Leben ausgelegt hatte, legte den grössten Wert darauf, in den Ozean des Spiels seines Werkes nur einen starken Tropfen Wahrheit zu mischen. Aber George wollte nicht, dass nur ein Tropfen Spiels in den Ozean der Wahrheit falle. "Das Jahr der Seele" (1897) muss man in diesem Sinne lesen. Weil diese Gedichte zu wenig spielerisch und romantisch sind, wurde das Werk missverstanden. Zeitungen, Zeitschriften, Kritiker des naturalistischen Zeitalters haben ein grosses Unverständnis gezeigt und beschimpften das Werk als "wunderlich gestopfte Wortwürste oder absolut undeutsch." Berühmte Gelehrten meinten, nur die Jungen würden solche Gedichte schreiben. Bis Georges gesammelte Werke erschienen, wurde dieses Werk aber am meisten gelesen (31000), wenn auch mehr im Ausland als im Inland. Schon in der Einfachheit und Klarheit der Werke funkelt die Liebe zur Wahrheit. Die Worte sprechen ohne andere Mittel nur durch sich selbst zum Gefühl des Menschen. Das Werk erlaubt es nicht, die Worte zu deuten. Stefan George ist es in diesem Werk gelungen, die Elemente der deutschen Sprache in die starke Bindung mit der Natur zurückzurufen.

Diese Wahrheit in der Dichtkunst Georges hatte im Leben des Dichters einen ganz klaren Grund. Der Dichter hat nicht willkürlich wahre Gedichte gemacht, sondern er hat sie aus dem Erlebnis der Wahrheit im Leben, aus der Begabung mit vielen Freunden

geschaffen. Dazu möchte ich hier noch mehr sagen, um diese Behauptung auch zu beweisen. "Zu jedem Höheren ist Zusammensetzung gefordert. Der höhere Mensch ist die Vereinigung mehrerer Menschen; das höhere Dichtwerk verlangt, um hervorgebracht zu werden, mehrere Dichter in einem." Das hat H. v. Hofmannsthal geschrieben. Alle Begegnungen Georges mit Mallarmé, Hofmannsthal, Ida und vielen Freunden sollte man von dieser Idee geleitet verstehen. Die Gedichte, die in der Mitte des "Jahrs der Seele" stehen, sind 12 Dichtern und Freunden gewidmet. Unter ihnen sind Ausländer, ein Pole, ein Belgier, ein Holländer, ein Engländer und ein Österreicher. Man sieht sogleich, dass sein Kreis immer grösser und die Idee der Freundschaft immer stärker wurde. Schon ist Welt Georges nicht verschlossen, er schätzt die Idee des Lebens sehr hoch, und gerade jetzt, in der zweiten Jugend, sucht er die Versöhnung mit der Gesellschaft. Trotz dieser Gesinnung des Dichters hat man den George-Kreis sehr oft als mystisch, religiös, oder pädagogisch missgedeutet. Das Thema meiner Untersuchung soll hier sein, das Wesen des früheren George-Kreises klarzumachen. Ich möchte hier über folgende Dichter und Freunde des Kreises schreiben: Richard Perls, Cyril Mail Scott, Georg Bondi, Sabina und Reinhold Lepsius, Karl Bauer, Gustav Vollmöller, Gertrud Kantrowicz, Ludwig Derleth, Albert Verwey, Melchior Lechter, Max Dauthendey, Karl Wolfskehl, Ludwig Klages und Alfred Schuler. Ob es George gelang, die "Entfremdung" zur Gesellschaft zu retten, wird Frage eines Studiums des späteren George sein.

Horch was die dumpfe erde spricht:
Du frei wie vogel oder fisch —
Worin du hängst das weisst du nicht

真実を忘れぬことによって生ずるゲオルゲの性格的な相貌は、ベーリングルの著述の写真に、幾枚もつづいて出ている。若いゲオルゲの顔はすでに特異で、究めるには数度視線をそらせて、勇気を出し直す必要があった。1893年のゲオルゲについて、スウェーデンの詩人グスタフ・ウドグレン (Gustav Uddgren) の語るところによると、目は深く沈んで大きな眼窩にとり囲まれ、視線は捉え難く内面に向けられ、遙かなものを見ているようだ。その視線にあえば、未知の焰が身に流れこむ気がする。ひどくうしろにそった額、青ざめた顔、黒く滑らかに走る髪…鼻は軽く下に曲り、口は横に長く、苦痛を前にしたほほゑみを感じられる。顔面は烈しい嵐との戦いから得られた明析な緊張、絶対至高の命令をうかべ、言葉はゆっくりしていながら、反対するものを許さぬ情熱がこもっている。悩みの深淵を測り、熱情にみちて、真理を追うこの詩人は、何を思っただヨーロッパを歩き廻ったのか。彼は何よりも若い、生きた人間を求めた。そして第二に、外国を、特に南の国を学びたかったのだ。「ドイツ人は北方精神から」余り学ぶ必要がないが、ローマ的なものからは「明析さや太陽性」を学ばねばならないからである。彼は生涯、人間と友を求めた旅人であった。死んだ時、二つの小さな帆布の提げ鞆しか残っていなかったほどで、本

も道具も財産も彼はたくわえたりしなかった。

彼の求めた友は、生きていて若くて話ができる人だけに限られてはいない。ノルウエー、ポーランド、イタリー、イギリス、オランダ、ベルギーなどなどの国の詩人の作品の紹介がどんなに多いことだろう。若い時彼は多くの詩をフランス語や英語で書き始めた。閉鎖的な外見の詩人が、実は開放的なのである。「私は若い時代に、人の助けを借りずに嫌なものを克服しうるほど強かった。だが後年には、輪（Ring）によって結ばれているのを感じなかったならば崩れ去っていただろう。これが私の究極の智慧であった。」こういう時のリングとは何か？ リングはごく閉鎖的であって、たばねて力ができたと思うにひとしい物的・権力的妄想ではないか？ そう断定するのが世間の常識かもしれないが、こまかい配慮を友人にいただき、思慮深く援助を惜しまなかったということが、いいかえれば普通にいう友情がリングだといってさしつかえないのである。例えばこんな手紙がある——「君は好んで、巨大な秤りにのった物悲しい重荷についてのみ語っている。だが遠方の人間と一つになって生活をいとなむ魅力、その静かな慰さめを知らないようだ。われわれはどんなにしばしば、事件があるたびに友のことを思い浮べることだろう。どんなにその突然の出現が精神をうちひらき、どんなに彼があらゆる時間にわれわれに関与することだろう。……私は長い時間、多くの人々と話をした。彼らは自分の考えを展開し、私に詩を読んでもらった。風景や血のつながりが一つであるにかかわらず、どんなに彼らが私から隔っていたことだろう。だが、われわれの朗読会のことを思いおこすなら、そして友よ、君の声のことを思いおこすなら、どんなに君が私と親近であることだろう。どんな隔りもどんな穴や崖も問題にならないのだ。」このようにリングとは友の隔たりと親密さについての体験である。だがゲオルゲは、人間や自然の生死と同じく、友情の生死がどんなに秘密深いかを力説している。常に彼は友人を求め、友人とともに生きた。幾多の友情は破れ、また沈黙するところとなった。そしてとどまった友情はごくわずかだった。友情がとどまるには、協同の精神生活がなければならない。受け容れうるものを受け容れ、協同がなくなると友情は終るのだ。（„Wenn ein Verhältnis erschöpft ist, so wendet sich ein aktiver Mensch einem neuen zu. Da hilft mir meine Natur.”）彼にとって、ただ習慣だけでひきつづいている縁などは、全く憎むべきものである。友人といわれるかぎり、緊張した両方の関係がいるのであり、それがリングなのである。彼の最高の願いは自分より高いものを見出し、それに導いてもらうことであった。最高の友情は導きゆく師を求めて情熱を捧げることであった。そして一度だけ、丁度ダンテがヴィリギリウスとペアトリチェにおいて見出したように、ダンテとマクシミンにおいて、より高いリングを見出したのである。それでこのときの詩集は最高のリングを具現するものであり、「第七のリング」（Der siebente Ring）となづけられている。世人がクライスと考えるものを、本当に追究するならば、どこにもないも

のである。ゲオルゲ・クライスというのはこういうリングなのである。ゲオルゲの生活について報告しようとする、このリングを次々にたどるようなものである。ベーリングエルもザーリンも生の伝記でなく、交友の歴史を書いているのみである。彼が芸術主義者であるとともに人間主義者であったことは明らかである。なぜなら真理の精神をもって彼は芸術に対すると同じように友情にもものぞんだからである。第一詩集はベルリン、第二詩集はウィーン、第三詩集はパリで出版されたが、この三都市をむすぶあらゆる地方で彼は日々を送った。余りに転々としているので、時代を切って考えることも、その足跡をしるすことも不可能なのだ。どんな距離もいとわず、訪問に訪問を重ねたのである。大体1900年ごろに線を引いて、比較的ふるい友と新しい友にわけ、まづ少しふるい友についてまとめてみようと思う。

ゲオルゲが一方的に与えたように思われる友達としては、R・ペールスやC・M・スコットをあげよう。一人は前世紀的な詩人、一人は天才的な音楽家である。ゲオルゲが幸いにして乗り切ることができたデカダンスを背おう人や、デカダンスの根底にひそむ音楽の夢にたづさわる人と、ゲオルゲは衝突せず、平穏に交友を続けることができた。こういう方向の場合、リング（クライス）からみると、成果の少ないものに数えられるだろう。アクティヴにうけとり、やがて断ち切れるという迫力のある交友ではない。リヒャルト・ペールス (Richard Perl 1873～1898) は若くて他界するまで、ローマン文学に徹底してうちこみ、休みもなく旅し、一生デカダンスを奉じた。孤独で世紀末的なペールスはかなりの才能もあり、ショーペンハウエルやニーチェを好んだ。彼はゲオルゲの力強い魂が好きで、パリにミュンヘンに、よく従って歩いた。ゲオルゲも高く彼を評価し、その詩の甘さと悲しさを好んだ。彼の死はひどくゲオルゲを悲しませ、死によって友情はいよいよ美しいものになった。ペールスにはゲオルゲの実現されなかった分身のようなところがあるのかもしれない。英国の音楽家シジル・メア・スコット (Cyril Meir Scott 1879～) をゲオルゲは大変愛し世話したが、これは、ゲオルゲが音楽に熱を入れない人であっただけに、ちょっと不思議な気がする。スコットもペールスと同じく詩人の実現されなかった分身なのではなからうか。16才からドイツにきたスコットの管弦楽曲の最初の演奏をダルムシュタットで行うのに力があつたのはゲオルゲであった。歌曲、シンフォニー、オペラ、協奏曲、カンタータ、室内楽などに及ぶスコットの、著述家としての活動は余りしられていないが、二冊の詩集のほか、いろいろ著述がある。ゲオルゲは彼をひどく愛したが、彼もゲオルゲを崇拜、生涯変らぬ愛情で、ゲオルゲの五十の詩を英訳し、グンドルフに捧げている。

このような場合と逆に、若いゲオルゲが一方的に世話になったときもある。これもしか、リングの本質からいうと一方的であり、みのり多いものではない。まづゲオルゲ・ボンディ (Georg

Bondi 1865～1935) があげられる。1898年 ローマで見識ってから、彼の出版社に深い関係ができ、そのために芸術草紙の中心地がベルリンにあると考えられるようにさえなった。ボンディは詩人の要求にいつも耳を借したし、ゲオルゲについての思い出をものこしている。しかし誰よりも友情があつかったのはザビーナ及びラインホルト・レプシウス (Sabina und Reinhold Lepsius 1864～1942, 1857～1922) である。ザビーナ夫人は有能で活潑な画家で、夫と協力、富裕な邸宅に客を招き、しばしば朗読会を催した。サロメやリルケも出席したことがあり、サロメはそれについて論評している。彼女はゲオルゲの形式美と人格にうたれ、しばらくゲオルゲと彼より7年若いリルケとを近づけようとしたが成功しなかった。ベルリンではこうして、1900年前の数年間、よく冬をすごした。そして多くの一時的ではあるが意味深い交りもあった。哲学者のウィルヘルム・デュルタイやゲオルグ・ジンメルを訪れたのもこの時だ。ベルリンでゲオルゲは漸く重んじられ始めたが、このような哲学者とまづ接触したことも、ゲオルゲ文学の性格上注目されていだろう。マックス・デソワールという学者と交り、彼に注目されて、彼によってジンメルを識ったのである。ゲオルゲとジンメルは相反する性格の人だったが、ジンメル夫人の好意も加わり、かなり親しく交った。ジンメルのゲオルゲ論は、数少い哲学的なゲオルゲ論の中でまことに特異なもので、19世紀的なありきたりのわくを破った見方がすぐれている (Zur Philosophie der Kunst 1922 に三つのゲオルゲ論がある。)

一方的な友情や一時的な友情の例をあげてみたが、K・パウアーやG・フォルメラーのように、短い期間の接触でありながら、ゲオルゲについて、特に真理の詩人として、確実な同時代人批評を下している例も忘れてはならない。カール・パウアー (Karl Bauer 1868～1942) はシュツットガルト出の画家で、1892～1893年にゲオルゲを識り、詩人の頭部デッサンを行ったので知られている。画家らしい目でこのように彼は詩人を捉えている——「ゲオルゲは北独——ゲルマン系ではなく南独——ケルト系という感じだった。ゲオルゲの頭部はシラー——ダンテ型でありゲーテ——ホーマー型ではない。ことに彼はダンテのマスクに非常に似た横顔を持っている。その顔には夢と意志とが結合している。」大体このようにパウアーはゲオルゲを興味深く捉えたが彼によってゲオルゲのもとにきた若い同人、グスターフ・フォルメラー (Gustav Vollmöller 1878～1948) もゲオルゲの精神的使命をよく捉えている。彼によれば、ゲオルゲの言葉の術は余りにも多くの苦しみを秘め、大衆語に対する、未曾有の強力な対立によって硬化している。ここにゲオルゲの名誉と殉教性がある。何の偶然によってか、ラテン的、カトリック的、僧侶的、純芸術的、工人的詩人が、ドイツの荒地に投げこまれたのだ。彼の天才、予言、鞭、殉教、教訓を思うにつけて、彼の詩が未来の詩人の文法であり、教科書であることがわかるのである。フォルメラーは高齢にあって、亡命地のアメリカでこう語り、またゲオルゲについて詩を歌っている。

彼は若い時、芸術草紙に美しい詩を寄せた。そのドラマはドイツにおける唯一の象徴劇だった(Jaime)。ゲオルゲは彼のドラマの構成を大へんほめている。彼は実に多才な人で、詩のほかにもいろいろ活躍、ダスンチオを訳し、M・ラインハルトのために台本を書き、グライダーやスポーツの面にも活躍した。こうしておよそゲオルゲの趣味にあわぬ転向者であるが、ゲオルゲをはっきりととらえた点で興味がある。

しかし彼らは真理探究型の詩人としてのゲオルゲを批評したのであって、身につけたとはいえないだろう。真理の文学を具現した人としては、有名なK・ウォルフスケールやG・カントロヴィッツやL・デルレートをあげうる。重大な詩人であるウォルフスケールについては幾度かにわけのちに研究することにする。ゲルトルート・カントロヴィッツ (Gertrud Kantorowicz 1876～1945)は芸術草紙同人中唯一の女流詩人で、知性と善意にあふれ、勇気と節度に富んでいた。彼女はゲオルゲから多くの力を汲んだ。ゲオルゲも彼女の人格をほめて、eine, die schweigen kann といっている。ナチのユダヤ人追跡が烈しくなると、身の危険を構わず友人や詩人を庇護し、遂にとらえられて強制収容所に入れられた。そこでも屈せず、病人看護の役にはげんだが、1945年に死亡した。彼女はその日まで鉛筆と筆を走らせて詩を書いた。戦後に詩集が刊行された。(若干のすぐれた詩が *An den Wind geschrieben*, Agora. 1960 に出ている。)抵抗の詩人として、ニュージーランドで詩作したウォルフスケールとともに、彼女は、ダンテ型のゲオルゲ、文法的殉教的ゲオルゲを具現した詩人だといえよう。二人とも倫理的立場に立つといえようが、もう少し宗教的な友達としては、重厚真摯で修道院に身を捧げるに至ったアウグスト・フースマン(August Husmann)や終生クライスに属して心が変らなかつたルードヴィヒ・デルレート(Ludwig Derleth 1870～1948)がある。デルレートは小柄で、繊細だったが、直立の姿勢、軍服、まっすぐのカラー、黒々した髪と目、蒼白の顔、小さな口、きびきびした挙動などで大いに特色のある詩人だ。その言葉も命令形が多く、自らの確信をゆづろうとせぬ堅いキリスト者であった。ゲオルゲによれば仮借なき欲求者(Unerbittlicher Verlanger)である。詩集 *Proklamation* (1919)ではすべてが命令的に出てくる。キリストが時代はづれのきびしさを要求するのだ。ベーリンゲルは彼のことを季節はづれのキリスト教者といっている。彼は命令して眠る者をよびさます。詩集 *Der fränkische Koran* はゲオルゲの死後に出たもので、宗教的な真剣さにみちている。クレードで始まり、リターナイで終るという風である。飛躍する形象、自由律と形式詩の並存、長詩と短詩の混在、天国の追究と地上への帰還、ペシミズム……これらはむしろウォルフスケールに於て、ゲオルゲから遠い。古典的厳格さよりも、歓呼嘆息求愛する表現主義なのである。だがゲオルゲはデルレートの精神を次のように歌って、共鳴点をも見出しているのである「君は麓の視線をもち、喜んで太陽に向う。下を向けば打ち、噛むのみだ。君は、余りにも安価な肉にわな

とむちを考え出し、怒りと厳格さで疲労した心を甦らせる、そういう一族の出だった……」宗教的なデルレート、倫理的なカントロヴィツ、情熱的なウォルフスケール、すべてはゲオルゲの特色をはっきりと自己に刻印した人達だったといつてよい。

しかし逆に、ゲオルゲの宗教性に反対したヴェルヴェイや、凝固した芸術にあきたりなかったレヒターや、真理に顔を早くからそむけていたダウテンダイのような人々もいる。これらの場合、交友は最も緊迫感に富んでいて、そこに多くのゲオルゲ非難も読みとりうるのである。自ら詩派（Nieuwe Gids）を組織して、芸術草紙に少なからぬ影響を与えたオランダの詩人、アルベルト・ヴェルヴェイ（Albert Verwey 1862～1937）は、ゲオルゲとの長い友情の記録を発表している。ゲオルゲも老年に真の友としてヴェルヴェイの名をあげて語ったし、ヴェルヴェイもゲオルゲの死後、詩人に対する友情の言葉を惜しまなかった。二人は最も男らしい友情の実例を相互の批評で示している。ジャイメによると、ヴェルヴェイは15冊の詩集と多くの散文があり、社会主義にかたむいた信仰深いカルヴィニストで、スウィンバーンのように海の詩人であった。だがスウィンバーンと違って、穏やかな海岸を、静かな海風を、オランダの砂丘を歌った詩人である。イエスを歌ったソネットやニーチェに寄せた詩が注目される。フランス、イギリス、ドイツに広い目をもって開かれていたヴェルヴェイは、オランダ文学の真の伝統を失うことがなかった。最初から彼は、ゲオルゲが人格の威厳を求め、事物から距離を持とうとしている点を指摘し、自分こそは事物に対するオランダ的な愛を持ち、現実を輝かす者であることを誇りにしているとのべていた。ゲオルゲの「第七の輪」でヴェルヴェイのゲオルゲ批評がはっきりと形成される。ゲオルゲのファンタジーは、現実ではなく、文化史の表象ではないか；マキシミン体験も文化史的で、体験以前に成立していた概念なのだ；ゲオルゲの多くの詩は感じられたというよりも、考えられたものだと言った。さらにヴェルヴェイは、ジャイメのいうところでは、キリスト教の立場からもマキシミン体験を攻撃した。1910年二度会っているが、その時、このような批評にひるまず、いよいよ真理と倫理と宗教に深入りしつつあるゲオルゲは、自分は全世界に対して一人で立つ者だと言った。するとヴェルヴェイは、それは予言者になって、詩人でなくなることだと反対した。現実と理想、感受と思索、文学と宗教の対立が、かってホーフマンスタールとの間に生じた娯楽と真理の溝のように、大きく二人のあいだに生じてしまった。そののち手紙はしばしばかわされているが、そう友好的ではない。何十年にわたる友情が、1914年以後停滞したのは、情熱的に正義を求めたヴェルヴェイが、大戦でドイツのみ有罪だと確信したからである。クライスの人達はこれにがまんし切れなかった。「新しい国」の中でゲオルゲは、昔の文化共同体を忘れぬようにしようではないか、と呼びかけている。この戒めに答えてか、1936年にヴェルヴェイは立派なゲオルゲ論を書いている。またゲオルゲ全集には多くのヴェルヴェイの詩が訳さ

れている。大切な友情が、もっと宿命的で悲しい結果に終わっているのが、メルヒオール・レヒター（Melchior Lechter 1856～1937）の場合である。ベルリンで活躍して、当時支配していた印象主義の芸術に烈しく反対していたこの画家は、芸術草紙を読むや感心してゲオルゲに手紙を書き、それ以来（1894）二人の交友が始まった。レヒターはとくにゲオルゲの詩の色彩感をほめたといわれる。ヴォルタースによると、しなやかな優雅さ、禁欲的な創造、恍惚とした表現を好み、敬虔な精神、真摯な態度がゲオルゲとむすびつきやすいところがあった。彼は苦学して作品の形成に邁進し、時流にそむき、フロレンス派やヴェニス派を好み、バックリンやラファエル前派を愛し、ワーグナーやニーチェを読んだ。その理想は、ゲオルゲににて、最高の精神と最大の美を統一するにあった。彼は自分の作品がいっぱいつまっている借間にしばしばゲオルゲを招き、二人の協力が始まった。レヒターの手で、詩集が次々と（*Das Jahr der Seele*, *Teppich des Lebens*, *Deutsche Dichtung*, *Gedenkbuch für Maximin*, *Der Siebente Ring*）美しく装って行いった。（レヒターはスヴァスチカをクライスの学術書に用いたが、これはナチのハーケンクロイツと無関係である。）レヒターはゲオルゲの詩から実に多くを学び、こうして美術と詩の価値交換が続いたのであるが、大戦前あたりから、二人の考えに差異が生じてくる。例えばレヒターはスウィンバーンを訳すようにゲオルゲにすすめているがうけ入れられない。また1913年の詩集（*Der Stern des Bundes*）がレヒターの手をへていない。ゲオルゲはスウィンバーンを卒業したつもりだし、また昔の装ていのけばけばしさがまんなくなってきた。そして昔の簡素な、自分が行った様式に逆もどりしたのである。このころから二人の相異はいよいよ明確になってくる。レヒターは教会のステンド・グラスに熱中し、神秘思想に進み、音楽に没頭し、インド的なものにあこがれる。またリルケがいたミュゾットやラーロンを描き、リルケのかたわらに墓地を求めた。これらすべてのなかに、レヒターの静かなゲオルゲ批評がみられる。ゲオルゲからはなれて、ホーフマンスタールは娯楽と劇場を、ヴェルヴェイは事物への感覚を、レヒターは流動的内面性を求めている。三人とも1907年の「第七の輪」あたりから疎遠になり始めている。この詩集がはらむ問題性は、その後も若い人々の間にくりかえして頭をもたげている。抒情を殺し、音楽に流れず、内面と神秘に抗し、神話的でも実存的でもない、「流転と変化」をきろう、見るものを石にするとさえいわれる「メドゥーサの頭」のようなゲオルゲが、レヒターから別れをつげたのも当然である。それでもバーゼルでレヒターの作品展があると、ゲオルゲはわざわざそれを見にいくのだが、かってホーフマンスタールの劇を見て無言のまま去ったように、身を隠すようにして去っていった。シュテファン／シュテファン／とレヒターが叫んで、追わんとするのを構わずに、見知らぬ人のように。恋人のイーダと別れたときもそうだった。砕けた友情のリングは続ける方が罪深いという、おそろしく厳密な考え方といえるだろう。しかしレヒターがゲオルゲを

敬愛し、詩人の死後回想記を残した点、ホーフマンスタールやヴェルヴェイと同じであった。こういう例と少しちがって、最初から交叉しただけで隔っていた詩人として、マックス・ダウテンダイ (Max Dauthendey 1867~1918) をあげうる。芸術草紙にしばらく寄稿しただけであるから、多くの研究家は問題にしていないが、Johannes Klein を始め多くのゲオルゲクライス以外の文学史家は、よく注目している。始め形式美への親近感という点でゲオルゲと近かったが、ゲオルゲの精神秩序に反対、陶醉美をかかげ、ゲオルゲ的な美の破壊に走るようになった。W・グレンツマンの現代文学史によれば、その世界観は、自然の偉大な流れと調和し、そこに救いを求めるにあった。ニーチェ風の告知者となり、鋭利な議論を交えてディオニゾスによる救いを告げた。だがそれは創造的でなく、時代の一元論の波に乗ったものであった。彼が告げる天上の喜びにはメランコリーがひびき、世界とのナイーブな調和はかえって縁遠くなってくる。故郷を離れた彼は、インドネシアに行き、ロマンチックに歌いつつ、ドイツへの郷愁にかられて死んだ。しかし、彼の詩はとにかく美しいといえよう。生の瞬間がリズムカルに、強大に捉えられ、ひびきと色彩できわだっている。あらゆる微妙な印象の差異がよく表現されている。「色を歌い」、「宝石を嗅ぎ」、「光をささやく」という詩的結合に、ゲオルゲ的な輪郭の硬さが全く消えて、適中する箴言の力ではなく、うつろい変る水彩画の、瞬間的な色と線が残ったのであった。このようにダウテンダイはゲオルゲの技術にまっこうから対立するものをかかげた詩人だった。とはいえゴットフリッド・ベンは「二重生活」(Doppelleben)の中で、二人の会合についてのべ、このへだたった二人とわれわれとが、さらに多くへだたっていることに感動している。1893年2月のこと、カフェ・パウアーの二階ホールでダウテンダイはシルクハットと英国製フロックコートの紳士から挨拶をうけた。貴下が寄稿した詩について相談いたしたいというゲオルゲの伝言である。やがて同じくシルクハットとフロックコートのゲオルゲがやってきて、句読点について話した。ベンはそれについてこういっている：「フレーズの始めに疑問符をおくこと。そしてそのため三人の紳士がまるで決闘か国事でも執り行うようにおごそかに会見すること。これは断じて気取ったやり方ではなく、断じて誇張した行動ではなかった。それは世紀末ヨーロッパの最も深いまじめさのこもった行為であり、男性的であり、僧侶的でさえあり、それは運命であったのである。それは芸術の福音から出た掟であった…(原田義人訳)。」

若いゲオルゲをめぐるなされた批評や抵抗のなかでも、最も興味深いのは、カール・ウオルフスケールをめぐるなされた、クラゲスとシュラーの反ゲオルゲ活動であろう。騒がしい町だとして、多くの大切な友人がいたのにゲオルゲはベルリンを好まず、はるかにミュンヘンを好み、より長くそこに滞在したが、その町でかえって最も危険な交友が生じたのである。「ミュンヘンではまだ生活が生き生きしています。まだ精神があります。そこはビュルガー(市民)の

いない唯一つの町です。そこにはフォルク（国民）と青春とがあります。もちろんフォルクがいつでも気持がよいというのではないが、このベルリンのごったまぜよりずっとよいのです。」しかしこのミュンヘンで、重要な、最も政治的な、ナチズムの前衛との衝突のような事件がおこったのである。しかし私はその話に進む前に、ゲオルゲクライスで最も重要な人間の、カール・ウォルフスケール（Karl Wolfskehl 1869～1948）について、その初期の活動について、のべてみなければならない。彼はクライスの同人、ゲオルク・エドヴァルト（Georg Edward）に紹介されてゲオルゲを知り、その後死ぬまで友情を失わなかった。死の一年前に、彼はそのころの思い出をしるしている：「エドヴァルトがマイスターの作品を私に教えてくれたのだ。1892年の初秋の日曜日だった。私はマールブルク街の五番地に住む、未だ二十三才の若者だった。彼は私にゲオルゲの詩を知っているかと聞いた。『君にとって大変な意味をもつだろうよ。』というのである。私はどうかして知りたいものだと言った。私はゲオルゲについて漠としか知らなかった。次の日、私は三巻の詩集を入手した。当時恥づかしがり屋の私にとって異例のことだが、すぐビンゲンのゲオルゲに手紙を書いた。すぐ答がきて、芸術草紙数巻を得た。私の運命はこうして刻印され、私の生涯はその意義を得た（Merkur 91, Briefe von Karl Wolfskehl. Werner Boco）」彼には、魅惑的善意や燃える情熱で、影像や思想を投げつけ、多くの人をひきつける天分があった。その処女詩集（Gesammelte Dichtungen）は未だゲオルゲの束縛を脱し得ず、言葉の術に人間の最高の力を見出し、美しい形象で最高の現実を歌って、世界の没落に対し精神の楯をかざそうとしている。だがのちの詩になると、ゲオルゲ的な、明析冷徹な色彩や自然界の彼方の影像が減少し、一見凝固した世界は内部の世界によって震え始め、烈しい嵐のように詩が立ちのぼってくる。彼はゲオルゲの友情に生きつつ、常にその対極として詩作し始める。ゲオルゲが発展する相の中に静的秩序をいつも宿しているのに、ウォルフスケールは静かな住居を求めず、流動し、ひきさらうリズムと生命を欲した。その詩句は内的感動に富み、呼びかけ、問い、叫び、生の不安を捉える。のちの詩をまとめた詩集（Der Umkreis 1927）は言葉の達しうる最高度の流動性を獲た、疑いもなしに偉大な詩集である（Jaime）。彼のこの傾向は原始的な方向と結びつく。天と地、聖と罪などの根本テーマから、ゲルマン世界への愛好心が湧いてくる。彼は現象をすかしてその底に世界の報知を聞き、その比喩をゲルマン世界に見、古代ゲルマン詩の翻譯を行った。しかし彼は偏狭な熱狂をもってそうしたのではない。彼の多くのエッセイは言葉の良識ある教育者であることを証明しているし、書物がぎっしりみちたその家は世に有名な中心であったし、ヘリングラートは彼からヘルダーリンへの情熱を学び、パウル・クレーは彼の世話で世に出た。ハンス・カロッサを始め多くの同時代人の心には、彼の高い背と、うしろにそった頭と、情熱的な大きな口と、見えない盲の目とがやきつけられている。ルードヴィヒ・クルチュスはい

：「彼こそ詩人，予言者，博学者，ゲルマニスト，エッセイスト，しう集家，弁舌家，聖書通，ギリシャ通であり，ディオニゾス的でアポロ的，幼兒的で賢者のな一つの奇蹟であった。」彼の妻のハンナもひどく人を世話して，ゲオルゲのいうように深い海のような愛をもっていた（An Güte grundlos wie das Meer, an Liebe grad so tief）。この家でゲオルゲはヴォルフスケールと半日中，次の二行

im wind ein schaukeln wie von neuen dingen

der lüfte schaukeln wie von neuen dingen

のどちらがいいかを論じるというようなことがしばしばだった。これもベンのいう「芸術の福音から出た掟」によるのだろう。二人は詩句の細部にわたって研究し，言葉への愛によって結ばれていた。そして3巻のドイツ詩集を二人であむことができた。協同の仕事は互に遠い関係になって止むことはなかった。殊に芸術草紙の箴言の方は彼の力によるものが多いのである。

このすばらしい同人に劣らず才能があった同人は，同じくミュンヘンに住んだルードヴィヒ・クラークス（Ludwig Klages 1872～ ）であった。ゲオルゲはディオニゾス的なヴォルフスケールに対しては，もっと忍耐がいる（Ein wenig Geduld und viel Eingebung!）と主張し，若い人に余りすすめなかったが，クラークスに対しては，そんなに繊細で浮動的であってはならないと戒めている。「もっと 純粹に，強く，確実に書け！ 音をもっと 明析に！」などのべて，実にクラークスの弱点をうきばりにしている。詩を書く場合，あいまいさは危険な思想をいれるから斥けられねばならないのだ。ゲオルゲはクラークスを頻繁に訪れ，彼の心に詩を目覚め，またクラークスは哲学的考察によってゲオルゲに多くを与えた。当時からクラークスは筆跡学者で，同人の筆跡を見て彼らの性格を見たこともあった。しかしクラークスの詩や筆跡学でなくて，世界観が重大問題をひきおこすのである。初めクラークスは，「巡礼」や「アルガバル」の北方的な神話，非キリスト教の息吹きに感動したが，「心の年」では異教的戦慄が退いてキリスト教的になっている といって，不満を覚えている。1900年ごろクラークスはゲオルゲ論を書いた。その後「人生のじうたん」が出ると，中世への復帰だといって，いよいよ不満を感じた。彼は一見，ヴォルフスケールに近い，古代ドイツ研究から出発したが，人類の更生を原始宗教への復帰にありとなし，ロマンチックな憧れと根源への情熱にもえ，母なる大地の脈打つところへ飛びゆこうとする。もちろんこの考えは，ゲオルゲにも，ヴォルフスケールにも影響したが，ゲオルゲは思慮深い造形世界に，ヴォルフスケールは古代キリスト教の倫理世界にふみ止まり，クラークスにくみしなかった。文明に対する反抗の手段が全く別で，ゲオルゲは「アルガバル」の世界をすぐ脱皮し，ヴォルフスケールは宇宙的なものの見方にすぐ帰りつくのである。「ゲオルゲは混沌をはめるローマン家よりも一層現実近く，空想的冒険家よりも一層冷静だった。二人の

論争は大変ドイツ的な宿命を宿す。形式のない情熱か、擬古的な枯渇か、身をやきつくすか冷え切るか、これはドイツ人永遠の問題で、この点でゲオルゲはローマン家というより古典家、北方人というより南方人であった（上村清延氏）。」しかしこの対立的な見方だけなら、これまでホーフマンスタールやダウテンダイとの間にみた通りなのだが、クラークスの思想の場合、容易に一切を破壊する世界主義となっていくのであった。クラークスはウォルフスケールを愛してよく交っていたのに、急に友情を裏切り、破局ののちに憎悪する。その原因は、意見や芸術の違いによるのではなく、ウォルフスケールがユダヤ人であったからである。ゲオルゲにとって、これほど不可解なことはなかった。二人はよく似た考えを持ち、同一根源から出ている。それでかえって憎みあうのだろうか。ユダヤ人とかドイツ人とか、一体どこが違うのか。クラークスは理論の穴におちこんで、人間を見る現実感覚を失ってしまった。「ブロンドだろうが黒髪だろうが、同じふところから出た者よ、誤解しあって、さがしあいつづくみあい、常にさすらって決して満たされないで……」とゲオルゲは「約束の星」で歌っている。だが悪いことに、このクラークスに加勢したもう一人の、ウォルフスケールとも交っていた同人がいた。アルフレット・シュラー（Alfred Schuler 1865~1923）である。彼が現代に対して抱いた烈しい侮蔑はゲオルゲのポルタ・ニグラ」や、「仮装行列」に、彼の古代への情熱は「約束の星」の家の霊に、またその破壊主義は「神秘的ドイツ」に歌われている。つまらぬものにみとれて、柱と家をゆるがすデーモンに注意しない人々に、ゲオルゲは警告を発している。考古学者であったシュラーがどうして破壊的思想に到達したのかはわからない。彼は墓場をけがす学として考古学をやめたが、なお壺のかけらなどを手に聴衆を魅惑し、古代感情の体験者をもって任じ、現代に対する憎悪のうちに生きた。彼はゲオルゲに傾倒し（ウォルフスケールは *Seine Verehrung für George ist grenzenlos* と書いている）、実に多くゲオルゲから学んだが、ゲオルゲも彼から現代に対する見方を少しは学んだであろう。だが無条件にではなく、冷静に、距離をとって、詩に歌いこんでいる。彼がクラークスに劣らず危険であることを早くからゲオルゲは知っていた。しかし彼が現代の警告者として大きな意義のある、恐らくは対決すべき存在であることを予感したのであるだろうか、すぐにたもとをわかつことができないのであった。シュラーは神につかれた如く語り、妄想狂の如く弁じ、自らをローマの後裔となし、ニーチェをワイマルからつれてきて踊らせたら狂気がさめると信じ、謝肉祭には自称のギリシャ踊りをやり、自らオルフォイス教徒だとなし、いよいよ空虚さをあらわすようになった。同学のルードヴィヒ・クルチウスはシュラーの雄弁こそ貧困そのものの証しであったとのべている。ジャイメは、彼が創造家でなくて煽動家であったとのべている。ローマ精神や過去の魂は、作品として作用せず、ただ霊的なまじないに終わった。彼はハーケンクロイツをナチの象徴として使うのに成功し、ユダヤ人に対する憎悪をふりまくのに最も力が

あった。この彼がクラークスと結び、ユダヤ人、殊にヴォルフスケールをクライスからしめ出すように要求した。限りを知らぬユダヤ人憎悪に、ゲオルゲがひどく怒ったことはいうまでもない。「クラークスはハノーバー人だ。その昔、フェニキヤ人はハノーバーまで来たから、クラークスもユダヤ人だ」と、ゲオルゲはシェラーの言った通りに言いかえした。（シェラーとクラークスはまたそう仲よくもなかった。）遂に1903年にゲオルゲは二人と断交してしまった。クライスにはユダヤ人が多かったし、そののちもこの点では変らなかった。ジャイメはゲオルゲの友達に不思議とユダヤ人やカトリック信徒が多い点を指摘している。E. R. Curtius もその問題に注目している。クラークスはゲオルゲに再考を求めたが、ゲオルゲの意志はかたかった。「人間の好みや芸術外の理由で、草紙への寄稿をうけ入れたり斥けたりせよと、何度も君は要求するが、これほどひどい冒瀆や侮蔑はない。こんな要求は斥けるほかに仕方がない。私がうけつけた詩がまづいとか嘆かわしいとかいうが、ずっとそれよりまづいのが、君の文通の中にある。ルーデヴィヒ・クラークスよ、一体何のために、めいめいが正しいと信じていることがあるのだろう。最も困ったことには、より親しくなろうとする人間関係を不可能にする術が用いられている。……」ゲオルゲは命がけでも、公然と断交を主張してやまなかった。クラークスの方もすぐにそれに報い、いろんな論文で交友が不能になるようにしむけた。グンドルフはゲオルゲにこの首尾についてこう書いた：「きらきら光るシャボン玉の彼らの世界観が砕け散ることはわかりきっていた。ヴォルフスケールが心配し、悪まのクラークスのあとを追ひ、人文科学委員会までついていったものだ。こんなことがなくなればどんなにいいことだろう。昔の教えの明るさに再びつつまれたなら！……一年前シェラーの学問を疑ったとき、かみつかれそうになったのと思うとふき出したくなる。今や彼らに残っているのはみせかけの術（Nur-kunst）だけなのだ。」こうして二人の友が去っていった。この二人は三十年もさきのドイツの最も危険な要素をそなえていたが、それとゲオルゲはきっぱりと対決することができた。晩年のゲオルゲがナチズムの本質を早くから見破ったのも当然である。

一つの真理をめぐって、一步一步と深まっていく者は、あらゆる方面から反対されるはずである。その静的な地盤は他のあらゆる動的地盤の硬度をはかる試金石であって、次から次と衝突がおこる。そしてみなその硬さが同類のものと感じられないようになってそれをあしぎまにいうのだ。娯楽がない、体験がない、音楽がない、感覚がないと、ホーフマンスタールやヴェルヴェイやレヒターやダッテンダイはいった。陶酔がない、根源がない、古代がないと、ヴォルフスケールやクラークスやシェラーはいった。現代では社会がない、大衆がないといわれているが、この方面の非難は、ゲオルゲが生きていた初期にはまだ見られない。右翼と断絶したゲオルゲ

は、左翼とも——もし機会があったら——断絶していたであろうか？ おそらくそうしただろうが、しかも人生と芸術の真理を一本に追い、活動的である点で、同時代の中でも最も明快な思想形成の可能性の強い詩人であったといわねばならない。それにしてもゲオルゲは、クラークスを斥け得たけれども、クラークスの影響を脱し得なかったのではないか。いいかえればひどい傷をうけてクラークス一派とわかれたのではないか。クラークスにとって、衝動と素質の総計である無意識の Seele（こころ、魂）がすべてで、理性や精神は生にさからう力にすぎない。創造力は無意識な力で、精神は登録機にすぎない。救いは理性を感情でしばるところにある。生はこうして性の混合である……このようなクラークスの説がゲオルゲの晩年に見えかくれしていないだろうかと疑われたこともある。なるほど晩年の作品に出る血とか原始とか獣とか龍とかいう語は、クラークスの影響があるといえぬことはない。しかしよく「約束の星」一巻をひもとけば、全巻が精神と理性と信仰による生の探究であることが誰にも明らかなのである。ここでは原始人の芸術をダンテより高く買うような思想はかかわりが無い。クラークスの偏狭な原始主義に反して、ゲオルゲの中には、キリスト教もギリシャも、古代も中世も、文化も倫理も、厳然とした座を占めている。ジャイメによれば、クラークスは1940年にシェラーの遺稿の序に、ユダヤ人反対のみにくいパンフレットをかき、そこでゲオルゲクライスを世界支配プランを持つユダヤ主義的秘結社だとのべた。正しい、自由な人間観が、右翼からこのようにひづめられたことがあったが、これに劣らず左翼から、獣性を持つ詩人という風に、或いは反動の助成者という風にひづめられたことも一度ではなかった。世の流れに杭を打ちこみ、真理にすがりつく者の宿命というべきであろうか。E. R. クルチウスは1929年にいった：「1905年の青年は審美的、1925年の青年は政治的でありたいと思った。」1950年の青年は社会的でありたいと思っている。しかしゲオルゲは1905年には審美的でないと言われ、1925年には政治的でないと言われ、1950年には社会的でないと言われ、驚くほど研究されることが浅かったようである。真のゲオルゲはすでに1890年に審美的であり、1905年に政治的であり（「時代詩」）、1925年に社会的であった（「新しき国」）。しかし世人は、常に時代の波に浮かぶものに注目した。そして一歩先を行ったものを、かえって時代おくれとして、忘れようとした。

初期ゲオルゲの研究には、こうしてみるとすでに全ゲオルゲ研究につながる問題が殆んど出ている。だからここで、中期のゲオルゲに入る前に若干の問題を簡潔に、独断にならぬために最近の学説を中心に引用して整理したい。

「芸術のための芸術にすぎないではないか？」「芸術家は形態を生むことによってすでに人生と結びつく。そして市場や機械よりはより持続的な潜勢力を持つのである。美的感覚に吹きこまれた芸術家は単なる美以上のものを創造する。……この時代に単に審美家にとどまった詩人は一

人としていなかった。ゲオルゲもダヌンチオもホーフマンスタールもそうしなかった。もっとさきの詩人たちもそうしなかった。ポーもロセッティもボードレールもワイルドも。(E. R. Curtius)」「純粹に芸術的な立場の完全な清潔さと閉鎖性を保持し、芸術としての本質を歪曲する一切のもののからの芸術の解放を保持すること、それにもかかわらず芸術を、歴史的なまた宗教的な、精神的なまた形而上学的なものとして、全体性を展開する生の流れにおける波として把握すること、それらによって芸術は芸術のための生、生のための芸術を開示しつつ、芸術のための芸術の世界にふみとどまる (G. Simmel)。」こういう原理によってゲオルゲはダンテを、ホーフマンスタールはカルデロンを学び、ラテン性を身につけ、力づい芸術主義を獲た。思うにクルチウスのいうように、キリスト教圏の二人の世界詩人ダンテとカルデロンは、ゲオルゲとホーフマンスタールのようなまたとない大きな対比を、形式においても内容においても示していたのである。

〔真理のための真理にすぎないではないか？〕「芸術、ことに詩は、ゲオルゲクライスの表現と知識の泉であった。これを審美主義と同一視してはならない (C. Hohoff)。」「ホーフマンスタールの巨大な目標は、ヨーロッパ文化史にここ数百年間にいよいよ深くあらわれた深淵を埋めるにあった。それは啓蒙的教養世界と根源的遊戯世界の溝である (E. R. Curtius)。」「ゲオルゲが『娯楽としての文学』にホーフマンスタールが加担した瞬間から、『娯楽としての文学』を否定したのに対して、ホーフマンスタールは『娯楽としての文学』に加担しながら、『永遠化としての文学』にあくまで誠実であるゲオルゲを最後まで一瞬も否定していない (小川正己)。」小川氏はさらに、真理に忠実であるものは、民衆の生活を犠牲にすることによってものの相貌をおびる、といっている。しかしゲオルゲの文学は、芸術愛と真理愛の象徴になりたっているのです、必ずしも真理「のみ」ではないであろう。内容重視の箴言詩すら真理「だけ」ではないのである。しかも「音楽になろうとする努力や数学に浄化せんとする努力ですら、たしかに人間的である (H. V. Hofmannsthal)。」だから、なぜ真理愛が人間的ないし詩人的でないといえようか。

〔民主主義的なところがなかった？〕「ゲオルゲは19世紀に根をおろしていた多くの詩人と同じように、すでに歴史的になった物の見方に立っていた…彼の考えに詩人を神聖視する見方があがるが、これも彼がその当時の英仏の多くの詩人たちと同じイデーを持っていたことを示している。……自然主義的社会主義的傾向に対する反対感をすぐ政治的民主主義に対する反対のあらわれだとみてはならない。彼は実に謙虚で、中部ライン方言で話し、四角い百姓ベットの寝、パンとぶどう酒の粗食を愛し、決して壮重ぶるところはなかった。ゲオルゲの態度は人々のいうような直感によるものでなく、青年時代の地はだについた思考によるものだった。彼もまたイブセンを訳し、古典派支流と戦い、ロマン主義支流に反抗し、1886年代の詩人としてひどく新しかったのだ (C. Hohoff)。」「ゲオルゲの精神的な支配性は自己自身に与えられた力によるものであつ

た。彼は自己の力による立法者である。ホーフマンスタールの権威はオーストリー的な合法的相続権に基づいていた。この対照は二人のあらゆる表現によくあらわれている (E. R. Curtius)。」「詩人というものは王宮と妻と子と人をすて、聖地に巡礼する王に似ていないだろうか。彼は帰ってきたが、下女の指さす片すみに物乞いの如く横たわり、犬と寝て、すべて自分に属するものを、一切のできごとを見ている。一切の中心となって、一切の関連を、出あい、結合を (Hofmannsthal)。」「精神面にあらわれた保守性は、すべて詩人の場合は比喩である。ゲオルゲクライスもまたそうであった。ホーフマンスタールの民主的な詩人観、一流も最も貧弱な記事もふくめて詩となす、後裔 (Deszendenz) という面白い言葉ですべてを容れる、いかにも包容力にとんだ文学論が、この芸術上の民主主義が、ゲオルゲの厳しい芸術論よりすぐれているか否かは、政治の立場をすてて、芸術の真実に立って考えねばならないのである。

〔世間と和解せんとして失敗した詩人ではないか?〕「ゲオルゲの名を聞く者は、すぐ社会との断絶 („Bruch mit der Gesellschaft“) を思い出す。これはゲオルゲにとって大変重要なことで、ゲオルゲは生涯これをテーマとして扱ったのである。しかしこの語はゲオルゲにおいて弁証法的発展をとげた。社会との断絶は第一歩にすぎず、それをこえて彼は再び結合を試みた („das knüpfen der zersplitterten goldenen fäden.“)。彼は決して単なる否定にとどまっていた。彼はあらたな共同体を求め、またうちたてんとした。このような試みが一体成功したがどうか、私の研究のテーマである (Claude David)。「芸術のための芸術はアルガバルで最も純粹に表現された。歴史上ひどく評判の悪い王の名誉を救い、石化した下界を歌い、のろわれた黒い花の庭をたたえ、現実の世界を嘲笑せんばかりである。これは否定と悪の讃美だ。このニヒリスチックな詩の根源は、孤独と疎外の感 (das Gefühl der Einsamkeit und der völligen Entfremdung) である。……これは読者をあてにした文学ではない。むしろ彼らを防ごうとするものである。……こうして自らでみちたりていて他のすべての社会とは完全に疎遠な、閉鎖的な共同体が生まれた……ゲオルゲの弁証法の第一歩はこうに分離的であったが、第二歩は和解的であった。社会と詩人の関係は大きく変りだす。美はもはや frei von jedem Dienst でなく、zur Erziehung dienen する手段である。これは美的教養の理念に近い。彼はドイツの粗野 (deutsche Barbarei) を救おうとする。芸術草紙は生の舞台となる。こうして人文主義的肯定による初期の自己否定が生じ、Entfremdung は克服されたかにみえた……だがそれも短い間のことで、第三の Die Phase der Eroberung (征服) が始まる。神と教義が求められる。言葉と行為が離れなくなる。大部分の墮落した群衆と選ばれた自覚者の二つのグループに人間がわかれ、晩年ほど Entfremdung が大きくなっていく。彼は再び公衆から身をとぎす。住所もなく、転転と旅して生きる。

千万回も聖者は狂気を打たねばならぬ

千万回も聖者は病癪をひきぬかねばならぬ

千万回も聖者は戦いをいどまねばならぬ

詩人はこの病いが治ると予言するのみでなく、早くそれらが通過するように協力せよという。彼の作品は再び悪の賛美をもって終る。聖殿はアッティラのような王に焼きはらわれ、数百年のうちに新しいものが生まれでる。こうしてマックス・ウェーバーがいう通り、クライスは経済界のことにはふりむきもしなかった。そこには資本の奴隷根性への烈しい憎悪が感じられる。一般にウェーバーは世界を *entzaubern* せんとしたが、ゲオルゲは *bezaubern* せんとしていた。こうしたゲオルゲの魔術はいつでも世界に対する精神の自律を強調する。精神の国を建てた詩人はいよいよ孤立して、遂に *Entfremdung* を救うことができなかった (C. David: 要約)。」「しかし欲しようが欲しまいが詩人は社会の外には立てない。暴力的な歴史の車に対して詩人の手は無力であることが証明された。彼は悪を阻止できない。彼はただ自己を証明して名誉を救うことができるだけである。……ゲオルゲは混沌とした時代の詩人として、*entfremden* された詩人の運命をホーフマンスタールよりももっと深く、もっと苦しく体験した。彼は、彼が情熱的に非難した、歴史から救おうと熱望したこの彼の時代の表現者として、文学史に残されるのである (C. David)。」

「ゲオルゲの思想は歴史的流行にそうたもので、永続性が疑われるのではないか?」 「私はひどく感動しゲオルゲを崇拜したが、次のことが私を大変不安にした：私は彼のマクシミン崇拜を尊敬するが、ともにわかつことができない、私はギリシヤの熱愛者であるがキリスト教世界に所属する (E. R. Curtius)。」「肉体の神化、神の肉体化がマクシミンの中に顕現した。この肉体崇拜とそれによる超越は世紀転換期の愛好テーマであり、Dauthendey, Däubler, Bruno Wille, Wilhelm Bölsche ほか多くの詩人に見出される。ゲオルゲにおいてのみこれがスキャンダルであるとすれば、それは彼が偶像を余り真剣に見つめたからにすぎない。ゲオルゲがマクシミンを神として尊んだに比し、他の詩人はもっと賢明で、*Liebe, Weib, Leben* に熱中したまでのことであった。(C. Hohoff)。」 同様なことをわれわれはゲオルゲのいろんな問題にあてはめうる。しかし思想は一つの強調であり、アクセントではないか？ ゲオルゲのアクセントが強かったことは、思想の力を実証するゆえんではなからうか。住所すら秘めて安住しなかったゲオルゲの孤独がつくったクライス思想についても同じことがいえるのである。「大都市文明の群衆の中では、秘密の場所以外のどんな場所に詩人が住めようか？」とホーフマンスタールのべ、ゲオルゲの次の詩を引用し、詩人の鳥のように自由な日々を解明した。

聞け にぶい大地がいうのを：

「君は自由だ 鳥か 魚のように。
どこに宿るかを君は知らない。

きつとのちの人の口はいう、
彼は僕らの机にすわり
僕らのかてをともにしたと。

美しい人が訪れたものだ、
だが時は過ぎ みな世を去った、
まだ誰かがきて その顔を

見れるかいなか君は知らない。」

僕らの机、僕らのかてを彼はわかちあった。われわれは強調されたゲオルゲの思想をさらに強調してはならない。ダヴィットの *Entfremdung* や、クルチウスの *Latinität* や、小川氏の *Wahrheit* や、ジンメル *Kunst für Kunst* を用いることすらすでに詩人の思想を強調し、自然な生涯を誇張しているのだといってよい。肉体の神化 (*Vergottung des Leibes*) もグンルドフが余りにも解釈しすぎてしまったのではなかろうか。Sein として, Zustand として, Leben として, ゲオルゲを解きたいものであるが、われわれに残された手紙などの資料がそれには未だ少なすぎるのが残念である。

追加文献 (学報 5 号のものほかに)

E. Jaime: Stefan George und Weltliteratur 1941

E. R. Curtius: Kritische Essays zur europäischen Literatur 1950

Stefan George im Gespräch

Zu Hofmannsthals Gedächtnis

George, Hofmannsthal und Calderon

H. Steiner: Der Briefwechsel George-Hofmannsthal 1941

K. Singer: Die Spur einer Dichterbegegnung (Aus VARIA VAR ORUM) 1952

H. v. Hofmannsthal: Der Dichter und diese Zeit 1907

C. David: Stefan George (Universitas) Heft 8 1959
C Hohoff: Stefan George (Universitas) Heft 6 1960